

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：13101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23266

研究課題名（和文）地方における初期テレビ受容の実証的研究

研究課題名（英文）Empirical Research on Early Television Reception in Rural Areas

研究代表者

太田 美奈子 (Ota, Minako)

新潟大学・人文社会科学系・助教

研究者番号：80846915

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は1950年代、新しいメディアとしてのテレビが地方に普及する過程について、青森県を事例として実証的に調査し、東京中心のテレビ史を相対化することを目的とした。県内各地で聞き取りと資料収集によるフィールドワークを実施した結果、大都市のテレビ史ではほとんど言及されることのなかった、テレビ電波環境の重要性が立ち現れた。地方では電波環境の整備に時間を要したため、各地で次第に建てられていく電波塔は電波受信可能圏/不可能圏を生み出し、電波をめぐる様々なドラマが引き起こされたのである。地方には「テレビを視聴したい」という欲望の一段階前に「テレビ電波を受信したい」という欲望があったことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、番組内容の受容とは異なるテレビ受容の歴史を明らかにした点にある。従来の初期テレビ史の研究では、力道山や皇太子御成婚パレードに代表されるような番組の視聴が議論の中心であった。これに対して本研究では、大都市から地方に視点を移すことによって、電波受信に熱中するいわば「視聴者以前」の受容者像を発見した。さらには、この受容者像によって、下部構造からメディア文化を捉え直す意義を示すことができた。多くのメディア媒体が無線技術を用いる現代において、はみ出す/満たせないといった電波環境をめぐるメディア文化は世界中で生まれており、本研究はこのような現状を理解するための嚆矢となり得る。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to empirically investigate the process of the diffusion of television as a new medium to rural areas in the 1950s, using Aomori Prefecture as a case study, and to relativize the history of Tokyo-centric television. As a result of fieldwork conducted in various parts of the prefecture through interviews and the collection of documents, the importance of the TV signal environment emerged which was rarely mentioned in the history of television in large cities. Since it took time for the TV signals environment to be developed in rural areas, the gradual construction of TV towers in each area created areas where receptions of TV signals were possible or impossible, and caused various dramas over them. It became clear that in the rural areas, the desire to "receive TV signals" existed one step before the desire to "watch TV".

研究分野：社会学

キーワード：メディア文化 テレビ テレビ電波 インフラストラクチャー 青森県 メディア考古学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本のテレビ史における地方の不足

先行研究において、日本のテレビ受容史は東京を中心とした大都市のみが語られてきた。地方の姿は大都市の受容を論じる際に補足的な形で触れられる程度となっており、皇太子御成婚パレードが地方のテレビ普及に大きく貢献したという「ナショナルな物語」、また、テレビが地方を「啓蒙」する役割を果たしたという「近代化の物語」に、その実態は収斂されていた。

(2) 日本のテレビを対象としたメディア考古学の先行研究の存在

飯田豊が2016年に出版した『テレビが見世物だったころ 初期テレビジョンの考古学』(青弓社)は、技術社会史の見地に立ち、テレビ本放送以前の公開実験について技術開発や多様なアクターの動きからその変遷を跡づけている。これまでの放送史に含まれていなかったこの忘れ去られた歴史は、日本テレビ史を大きく拡充し、新しさのなかに語られていた初期のテレビについて再考を促すものであった。

2. 研究の目的

(1) 東京中心のテレビ史の相対化

中央から地方に視点を移し、ある特定の地域のテレビ史を丹念に調べることで、東京中心となっていたこれまでの日本テレビ史の相対化を図る。さらには、地方から日本のテレビ史を補完する。

(2) 初期テレビ受容期に立ち現れたテレビ利用の可能性の検討

本放送開始がイコール電波環境の整備完了であった大都市に対し、地方では電波環境が整うまで時間を要したため、1950年代にはテレビの文化形式が不確定な時期が数年発生し、地域の文脈でテレビを受容する空白が僅かながら残されていた。この頃の受容の様相をたどることで、様々に開かれていたテレビの可能性を検討する。

3. 研究の方法

(1) フィールドワーク

聞き取り調査と資料収集を中心としたフィールドワークを実施する。各地域におけるテレビ受容の様相が記された資料は限られているため、実際にテレビ受容に携わった方々やそのご家族、当時を生きた人々にインタビューを実施し、テレビ受容の姿を掘り起こしていく。また、該当地域の学校に残された子どもたちの作文や予算・決算などの資料、地元紙、統計資料、行政資料などに当たる。

調査対象地域は青森県を選定した。理由の第一は大都市からの距離の遠さである。本放送開始の地である東京都から青森県は直線距離にておよそ600キロメートルであり、その次に開局した大阪府と愛知県からはさらに距離がある。青森県は大都市から放射される電波の恩恵を受けられる距離がなく、テレビを視聴できない時期が長く続くこととなった。理由の第二は青森県の自然的・文化的地理である。北は海を隔てて北海道、南は陸続きで秋田県と岩手県が隣接するという青森県の立地は、地域によって異なるテレビ受容を生み出した。また、青森県は地域区分として津軽、南部、下北に分けられ、それぞれの地域によって文化やことば、社会状況が異なり、多様な受容を生み出す基盤となっている。

(2) メディア考古学

本研究の研究枠組みはメディア考古学とする。メディア考古学の第一人者であるエルキ・フータモは、これまでの単線的・直線的・目的論的發展史観を拒絶し、メディア文化・体験における歴史の複数性や連続性に注目している。この視点をもって、青森県のテレビ史を、忘れ去られた、もしくは無視されてきたテレビ史としてとらえ、歴史の複数性や連続性に注目しながら掘り起こしていく。

4. 研究成果

(1) 電波受信に熱中する「視聴者以前」の受容者像の発見

青森県ではじめてテレビ局が開局したのは東京で本放送が開始してから6年後の1959年だが、人々はその数年前、つまり青森県内でテレビ電波が放射されていない時期からテレビを受容していたことが判明した。1956年のNHK仙台テレビ局に1957年のNHK函館テレビ局、1958年のNHK盛岡テレビ局と、近隣でテレビ局が開局するたびに、人々はテレビを購入し、新しく建てられた電波塔の方角に超遠距離アンテナを合わせて、どうにか電波を受信しようとしていたのである。いくつかの市町村でフィールドワークを実施したが、どの市町村においても、テレビ受容のはじまりは他道県からの電波受信によるものであった。これによって、地方には「テレビを視聴したい」という欲望の一段階前に「テレビ電波を受信したい」という欲望があったことが

明らかとなった。本成果は2 (1)に対応するものである。中央から地方に視点を移し、東京中心のテレビ史を相対化しようとする作業によって発見された受容者像であった。

(2) テレビ電波の伝送についての構造化

テレビ草創期における地方の人々にとって、テレビ電波環境は最大の関心事であった。東京で制作される番組の電気信号が各地の放送局・電波塔に届き、電波塔から電波が放射され、家々の屋根に設置されるアンテナがそれをキャッチするという一連の流れについて、本研究では放送制度としての「線」、放射される電波の「円」、実際の電波範囲としての「面」という3つの形から捉えることによって、議論を明確にした。

「線」とはテレビ番組を全国各地の放送局・電波塔まで届けるマイクロ波回線のことである。マイクロ波回線とはマイクロ波を用いた無線通信であり、東京を中心に日本を縦貫するように中継所が敷設されている在りようは「線」的である。放送の中央集権を表す形といえよう。「円」とは各地の電波塔から放射される電波が描く形である。テレビ草創期、地方の人々が意識した電波とは明確に「中心」と「周縁」を持つ「円」であり、電波受信に際して「電波塔から半径キロメートルまで届く」といった言い方がされていた。これは大都市も辺境も関係のない、技術的平等性を表す形である。「円」が放射される電波の形であるのに対し、「面」とは地上の実際の電波範囲である。電波は障害物さえなければきれいに円を描くが、実際は山や谷などの地形に左右され、いびつな範囲を形成した。本研究ではこの「線」「円」「面」という在り方を補助線に、受容の様相を検討していった。

(3) 実際の電波範囲の把握

テレビ史では、日本全国各地に電波塔が順次設置されることによって、テレビの電波範囲は次第に広がっていったと記されることが一般的だが、その詳細に触れられることはほとんどなかった。そこで、残存する電波地図を収集し、青森県をめぐるテレビ電波の整備過程を辿った。テレビ草創期には、県境をはみ出す/県域を満たせない電波環境があり、電波は次第に県域を形作っていくのだが、このような状況は現在にも一部続いていることが明らかとなった。

(4) テレビ受容の実証的調査

(3)で述べたような電波環境の中で青森県の人々がどのようにテレビを受容していったのか、1950年代の受容について、フィールドワークによる実証的調査を行った。この時代は他道県から青森県にはみ出す電波に一喜一憂し、テレビ文化を醸成する人々の姿があった。1956年のNHK仙台テレビ局開局を契機に、県内ではじめてテレビ電波受信に成功した八戸市の八戸高等電波学校では、漁業が盛んであり無線に近い人が存在していたという背景から、テレビを無線通信的に捉えていた。

県内にテレビ電波環境が正式に整う前、最もテレビが普及した市町村は下北半島の佐井村であった。1957年のNHK函館テレビ局開局を契機に、同村では学校を中心にテレビを受容していった。現在も「教育のまち」との呼び声が高い同村では当時、交通の便の悪さから村の外の世界を知らない子どもたちの将来を村人たちが心配し、「外を見る」という教育的な意味においてテレビが求められた。

佐井村がテレビに沸く頃、秋田県との県境に接する大鰐町では、函館からほとんど青森県を跨ぐような電波受信が行われていた。標高が高い同町は、函館との間に電波を遮るものが少なかったため、電波受信が可能となった。同町は県内屈指の温泉街として知られており、客寄せとしてテレビが重宝されたという。

八戸市と佐井村、大鰐町のほかにも、他道県から青森県にはみ出す電波の受信に取り組み、地域ぐるみでテレビを受容した事例が県内各地でみられている。これらの事例は1950年代における地方のテレビ受容の一つの在りようとして一般化できると考えられる。本成果は2 (2)に対応するものである。

(5) 難視聴の実態の解明

テレビ電波受信に熱心に取り組んだ地域の多くは、県内で次第に電波環境が整備されることによってその取り組みを終えていく。しかしなかには、平成に入っても満足にテレビ電波環境が整わない地域があった。岩手県と秋田県との県境に位置する田子町では、集落が山間の川沿いに形成されているため、家々のアンテナが山陰にあたり、電波受信が困難だった。そのため、同町は有線によるテレビ視聴環境の整備に3度取り組んでいる。電気店店主による取り組み、NHK共聴を経て、1994年に県内自治体が運営するものとしては初のケーブルテレビ局が誕生した。

テレビの番組内容の伝送は、マイクロ波回線や各電波塔などの無線技術が基盤となっているが、無線は有線で補わなければ成り立たない。同町の事例は、地方のテレビ史が難視聴、もしくは有線のテレビ史でもあることを示すものだった。

<文献>

【】内の番号は「4.研究成果」内の番号の成果物であることを示している。
太田美奈子, 2022, 『農業テレビ』としての自治体ケーブルテレビ 青森県三戸郡田子町の事例から 『村落社会研究ジャーナル』28(2):21-5. 【(5)】

- 太田美奈子, 2021, 「テレビ電波受信のメディア考古学 青森県を事例とした地方の初期テレビ受容に関する研究」早稲田大学大学院文学研究科 2021 年度博士論文 .【(1) ~ (5)】
- 太田美奈子, 2021, 「『線』と『円』のテレビ史 青森県を事例としたテレビ電波の考古学」梅田拓也・近藤和都・新倉貴仁編『技術と文化のメディア論』ナカニシヤ出版, 187-202 .【(2) (4)】
- 太田美奈子 2021, 「無線 / 有線からみる地方のテレビ受容 青森県三戸郡田子町の事例から」『ソシオロゴス』(45): 1-20 .【(5)】
- 太田美奈子, 2020, 「電波塔としてのテレビ塔 鷹森山を中心とした青森県の受容の記録」『早稲田大学文学学術院文化人類学年報』(15): 19-28 .【(4)】

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 太田美奈子	4. 巻 15
2. 論文標題 電波塔としてのテレビ塔 鷹森山を中心とした青森県の受容の記録	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学文学学術院文化人類学年報	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田美奈子	4. 巻 (45)
2. 論文標題 無線 / 有線からみる地方のテレビ受容 青森県三戸郡田子町の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソシオロゴス	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田美奈子	4. 巻 28(2)
2. 論文標題 「農業テレビ」としての自治体ケーブルテレビ 青森県三戸郡田子町の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 村落社会研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 21-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 太田美奈子
2. 発表標題 青森県におけるテレビ電波範囲の変遷
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会 2020年度春季研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Minako Ota
2. 発表標題 Reimagining the Analog Past: Early Television Reception in Sai Village, Aomori Prefecture, Japan
3. 学会等名 IAMCR TAMPERE 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田美奈子
2. 発表標題 テレビ電波整備の中央集権 マイクロ波回線が描く「線」から
3. 学会等名 第93回 日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田美奈子
2. 発表標題 放送受容のローカリティをめぐって 青森県の視点から
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会 2019年度秋季研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Minako Ota
2. 発表標題 Rethinking the 'Expanded' Era: Early Television Reception in Rural Japan
3. 学会等名 16th EAJS International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Minako Ota
2. 発表標題 Television Reception Beyond Boundaries: From the Case of Aomori Prefecture, Japan
3. 学会等名 IAMCR NAIROBI 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 梅田 拓也、近藤 和都、新倉 貴仁	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 280
3. 書名 技術と文化のメディア論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------